資治通鑑 第 076 巻

令和 4 年 7 月 23 日

【魏紀八】　起昭陽作噩，盡旃蒙大淵獻，凡三年。

■魏、蜀蜀、呉呉、続国訳漢文大成．経子史部 第 5 巻 048p

邵陵厲公下嘉平五年（癸酉，２５３年）

蜀［郭循は宴会で費禕を刺殺］春，正月，朔（１日），蜀の大將軍の**費禕**は諸將と漢壽に於いて大いに會し，**郭循**は坐に在り。**禕**は歡びて飲みて沉醉し，**循**は起ちて**禕**を刺し，之を殺す。（郭循はこの時直ぐに殺されている）**禕**の資性は泛く愛し，人を疑わず。越巂太守の**張嶷**は嘗て書を以て之を戒めて曰く、

「昔**岑彭**（42 巻漢の光武帝建武 11 年にあり）は師を率い，**來歙**（光武帝の武將）は節に杖り，鹹な刺客に害せられる。今明將軍の位は尊く權は重く，新附を待信すること太だ過ぎたり，宜しく前事を鑒み，少しく以て警を為すべし。」

禕は從わず，故に禍いに及ぶ。

■詔して**郭循**を追封して長樂鄉侯と為し，其の子をして爵を襲わ使む。（郭循は魏の刺客説がある）

【司馬師の名声顕る】

■［司馬師は敗戦の責任を一身に負う］**王昶**、**毌丘儉**は東軍（東關は三軍のうち最も東）の敗れるを聞き，各々屯を燒きて走る。朝議は諸將を貶黜せんと欲し，大將軍の**師**は曰く、

「我は**公休**（諸葛誕の字）に聽かず，以て此に至る。此れ我が過ち也，（5-049p）諸將に何の罪あるや！」

悉く之を宥す。**師**の弟の安東將軍の**昭**は時に監軍為り，唯だ**昭**の爵を削り而して已む。**諸葛誕**を以て鎮南將軍と為し，豫州を都督せしむ。**毌丘儉**を鎮東將軍と為し，揚州を都督せしむ。

■［司馬師は并州胡の反乱の責任も負う］是の歲，雍州刺史の**陳泰**は并州に敕して力を並せて胡を討つを求める，**師**は之に從わず。未だ集まらず，而るに雁門、新興の二郡（幷州北部）の胡は遠役を以て，遂に驚き反す。**師**は又た朝士に謝して曰く、

「此れ我が過り也，**陳**雍州之責に非ず！」

是くを以て人は皆な愧じ悅ぶ。

■［負けても人望ありとする］**習鑿齒**は論じて曰く、

「**司馬**大將軍は二敗を引きて以て己の過ちと為す，過ちは消え而して業は隆し，智と謂う可き矣。若し乃ち敗を諱み過ちを推せば，咎を萬物に歸し，常に其の功を執り而して其の喪を隱せば，上下は離心し，賢愚は解體し，謬り之甚しき矣！人に君たる者，苟しくも斯の理を統べ而して以て國を御せば，行い失いて而も名を揚げ，兵挫かれて而も戰い勝たん，百敗すると雖も可也，況んや再びに於いて乎！

■［諸葛恪誅殺の予言］光祿大夫の**張緝**は**師**に言って曰く、

「**恪**は克捷すると雖も，誅せられんこと久しからず。」

師は曰く、

「何の故か？」

緝は曰く、

「威は其の主を震い，功は一國を蓋うは，死を得ざるを求める乎！」

【呉の諸葛恪は北伐に暴走】

呉［諸葛恪の増長］二月，吳軍は東興より還る。太傅の**恪**を陽都侯に進め封じ，荊、揚州の牧を加え，中外の諸軍事を督す。**恪**は遂に敵を輕んじる之心有り，復た軍を出さんと欲す。諸大臣は以為えらく數々出て罷勞す，辭を同じくして**恪**を諫め，**恪**は聽かず。中散大夫（秩六百意志、諫議大夫の上に在り、顧問応対を掌り常事無し）の**蔣延**は固く爭い，**恪**は命じて扶け出す。因りて論を著わして以て衆を諭して曰く、

「凡そ敵國は相い吞まんと欲するは，即ち仇讎が相い除かんと欲する也。仇有り而して之を長ぜば，禍いは己に在らず，則ち後人に在らん，遠慮を為さざる可からざる也。昔秦は但だ關西（函谷關以西）を得る耳，尚ほ以て六國を併吞せり。今魏を以て古之秦に比すれば，土地は數倍なり。吳と蜀とを以て，古の六國に比すれば，半ばなる能わざる也。然るに今は能く之に敵する所以者，但だ**操**（曹操）の時の兵衆，今（魏が興るより 30 年餘年）に於いて適（まさ）に盡き，而して後生の者は未だ長大に及ばざるを以て，正に是れ賊衰少して未だ盛んならざる之時なり。加えるに**司馬懿**（事は前巻嘉平三年にあり）は先に**王凌**を誅し，續きて自ら隕斃し，其の子（司馬師）は幼弱に而して彼の大任を專らにし，智計之士有りと雖も，未だ施し用いるを得ず（司馬師を過少評価している）。今に當たりて之を伐てば，是れ其の厄會なり。聖人は時に趨くに急なり，誠に今日を謂う。若し衆人之情に順い，偷安之計を懷き，長江之險は以て世に傳う可きと以為い，魏之終始を論ぜず而して今日を以て、遂に其の後を輕んじれば，**(5-050p)** 此れ吾が長く歎息する所以の者也！今聞く衆人或は百姓は尚ほ貧しきを以て，息を務めんと欲す，此れ其の大危を慮るを知らず而して其の小勤を愛む者也。昔漢祖は幸い已に自ら三秦之地有り，何ぞ關を閉じ險を守りて以て自ら娛樂せずして，空しく出でて楚を攻め，身には創痍を被り，介胄には蟣虱を生じ，將士は困苦を厭とし，豈に鋒刃を甘んじ而して安寧を忘れる哉？長久に於いて兩つながら存するを得ざるを慮る者耳。毎に**荊邯**が**公孫述**に說くに（42 巻漢光武帝建武六年にあり）進取之圖を以てするを覽み，近くは家叔父（諸葛亮の事）が賊と爭競する之計を表（71 巻明帝太和二年の上表）陳するを見，未だ嘗て喟然として歎息せざるんばあらざる也！夙夜反側し，慮ること此くの如し，故に聊（いささ）か愚言を疏し，以て二、三（續は一二）君子之末に達す。若し一朝にして隕沒すれば，志畫立たず，來世をして我が憂うる所，後に思う可きを知らし令むるを貴ぶ耳。」

衆人は皆な心に以て可と為すと雖も，然るに敢えて復た難ずるは莫し。

呉［聶友も諸葛恪を諫める］丹楊太守の**聶友**は素より**恪**と善く，書を以て**恪**を諫めて曰く、

「**大行皇帝**（孫權死して歲を越えず、こう称す）は本は東關を遏める之計有り，計は未だ施行せず。<u>今公は大業を輔贊し，**先帝**之志を成し（續は欠如），寇遠く自ら送り（魏の兵は遠く来たりて自滅する），將士は威德を憑賴し，身を出し命を用い，一旦非常之功有れば，豈に宗廟の神靈・社稷之福に非ざる邪！宜しく且く兵を案じ銳を養い，釁を觀て而して動くべし。今此の勢いに乘りて復た大いに出でんと欲す，天の時は未だ可ならず而るに苟くも盛意に任せば，私心は以て安からずと為す。</u>」

恪は論（著して以て衆に喩す所の論）の後に題し，書を為りて**友**に答えて曰く、

「足下は自然之理有りと雖も，然れども未だ大數（勝負存亡の大数）を見ず，此の論を熟省すれば，以て悟りを開く可し矣。」

呉［滕胤も諸葛恪を諫める］**滕胤**は**恪**に謂って曰く、

「君は**伊**（伊尹）、**霍**（霍光）之托を受け，入りては本朝を安んじ，出でては強敵を摧き，名聲は海內に振い，天下は震動せざるは莫し，萬姓之心は，君に蒙りて而して息するを得んを冀う。今猥（みだり）に勞役（內に山陵營作の事有り、外に東關の師有り）之後を以て，師を興して出征すれば，民は疲れ力は屈し，遠主（魏主）は備える有り，若し城を攻めて克たざれば，野略して獲る無く，是れ前勞を喪い而して後責を招く也。甲を案じて師

を息(やす)め，隙を觀て而して動く（続による、耐觀×）に如かず。且つ兵者大事なり，事は衆を以て濟る，衆が苟くも悦ばざれば，君は獨り之に安んぜんや！」

恪は曰く、

「諸々の不可を謂うは，皆な計算を見ず，居を懐い苟くも安んずる者也。而るに子は復た以て然りと為す，吾は何をか望まん乎！夫れ**曹芳**の暗劣なるを以て，而して政は私門（司馬氏）に在り，彼之民臣は，固より離心有り。今吾は國家之資に因りて，戦勝之威に藉れば，則ち何に往きてか而して克たざる哉！」

呉［**諸葛恪の出陣**］三月，**恪**は州郡二十萬の衆を大いに發して復た入寇し，**滕胤**を以て都下督と為し，事を統べるを掌らしむ。

■夏，四月，大赦す。

【蜀の羌維の北伐、諸葛恪の北伐】

蜀［**羌維は費禕の志に順い出兵**］漢の**姜維**（天水の人）は自ら西方の風俗に練（熟知）せりと以(おも)い，兼ねて其の才武を負い，(5-051p) 諸々の羌、胡を誘いて以て羽翼と為さんと欲し，謂えらく隴より以西は，斷ち而して有る可しと。軍を興して大舉せんと欲する毎に，**費禕**は常に裁製して從わず。其の兵を與えること萬人に過ぎず，曰く、

「吾等は丞相（諸葛亮）に如かざること亦た已に遠し矣，丞相は猶ほ能く中夏（中華）を定めず，況んや吾等を乎！且く國を保ち民を治め，謹んで社稷を守るに如かず，其の功業の如きは，以て能者を俟たん，徼幸を希冀して，成敗を一舉に決するを為す無かれ。若し志の如くならざれば，之を悔いるとも及ぶ無し。」

禕の死するに及び，**維**は其の志を行うを得，乃ち數萬人を將いて石營（董亭の西南、甘粛省蘭山道隴西県旧鞏昌府内、現・定西市隴西県鞏昌鎮）を出で，狄道（甘粛省蘭山道狄道県、現・定西市臨洮県）を圍む。

呉■［**諸葛恪は淮南に入寇**］呉の**諸葛恪**は淮南に入寇し，民人を驅略し。諸將の或は**恪**に謂って曰く、

「今軍を引いて深く入れば，疆場之民は，必ず相い率いて遠く遁れ，恐らくは兵勞し而して功少なし，止まりて新城を圍むに如かず，新城は困しみ，救いは必ず至らん，至り而して之を圖れば，乃ち大いに獲る可し。」

恪は其の計に從い，五月，軍を還して新城（合肥の新城）を圍む。

■呉 蜀［**東西の戦役で東に集中**］太尉の**司馬孚**に詔して諸軍二十萬を督して往きて之を赴かしむ。大將軍の**師**は**虞松**に問いて曰く、

「今東西（呉と蜀の侵攻）に事有り，二方は皆な急なり，而るに諸將の意は沮(はば)む，之を若何せん？」

松は曰く、

「昔**周亞夫**（16 巻漢の景帝二年にあり）は壁を昌邑に堅くし而して吳、楚は自ら敗れる，事は弱きに似て而して強き有り，察せざる可からざる也。今**恪**は其の銳衆を悉して，以て暴を肆にするに足り，而も坐して新城を守るは，以て一戦を致さんと欲する耳。若し城を攻めて拔かざれば，戦いを請うも可(き)かざれば，師は老し衆は疲れ，勢いは將に自ら走り，諸將之徑ちに進まざるは，乃ち公之利也。**姜維**は重兵有り而して縣軍は**恪**に應じ，我が麥を投食し（姜維は食糧補給無し），根の深き之寇に非ざる也。且つ謂えらく我は力を東に並せ，西方は必ず虚ならん，是を以て徑ちに進む。今若し關中の諸軍をして倍道して急に赴き，其の意に出で使めば，殆んど將に走らんとす矣。」

師は曰く、

「善し！」

乃ち**郭淮**、**陳泰**をして關中之衆を悉して，狄道之圍みを解か使む。**毌丘儉**等に敕して兵を案じて自ら守り，新城を以て吳に委せしむ。**陳泰**は進みて洛門（天水の冀県の洛門聚、甘粛省渭川道通渭県、現・定西市通渭県平襄鎮）に至り，**姜維**の糧は盡き，退きて還る。

■呉［新城の張特は呉軍を欺く］揚州の牙門將の涿郡の**張特**は新城を守る。吳人は之を攻めること連月，城中の兵は合わせて三千人，疾病戰死者は過半なり，而して**恪**は土山を起こして急に攻め，城は將に陷ちんとし，護る可からず。**特**は乃ち吳人に謂って曰く、

「今我は復た戰うに心無き也。然れども魏の法は，攻められること百日を過ぎ而して救いの至らざる者は，降ると雖も，家は坐せず。敵を受けてより以來，已に九十餘日矣，此の城中に本は四千餘人有り，戰死者は已に過半，城は陷ると雖も，尚ほ半人の降るを欲せざる有り，(5-052p) 我は當に還りて為に相い語り，善惡を條別し，明日早く名を送るべし，且く我が印綬を以て去りて信と為せ。」

乃ち其の印綬を投げて之に與える。吳人は其の辭を聽き而して印綬を取らず。**特**は乃ち夜に投じて諸々の屋材を徹し其の缺を柵補して二重と為し，明くる日，吳人に謂って曰く、

「我は但だ斗死有る耳！」

吳人は大いに怒り，進みて之を攻めるも，拔く能わず。

■呉［諸葛恪の軍は崩壊］會々大いに暑く，吳士は疲勞し，水を飲み，洩下（下痢）し，流腫（足が腫れる）し，病める者は太半なり，死傷は地を塗る。諸營の吏は日々病を白す者は多く，**恪**は以て詐りと為し，之を斬らんと欲し，是より敢えて言うもの莫し。**恪**は內に計を失うを惟(おも)い，而して城の下らざるを恥じ，忿りは色に形(あらわ)る。將軍の**朱異**は軍事を以て**恪**に迕(さから)い，**恪**は立ちどころに其の兵を奪い，斥けて建業に還す。都尉の**蔡林**は數々軍の計を陳べ，**恪**は用いる能わず，（蔡林は）馬を策して（魏に）來奔す。諸將は吳兵の已に疲れたるを伺い知り，乃ち進みて兵を救う。秋，七月，**恪**は軍を引いて去り，士卒は傷病し，道路に流曳し，或は坑壑に頓僕し，或は略獲せられ，存亡は哀痛し，大小嗟呼す。而して**恪**は晏然として自若なり，出でて江渚に住まること一月，田を滎陽（揚子江の北側、湖北省江漢道黄梅県の界）に起こさんと圖る。詔召相い銜んで（相継ぐ），徐(おもむ)ろに乃ち師を旋す。此に由りて衆庶は失望し，怨讟は興る矣。

■［鄧艾は諸葛恪の失脚を予想］汝南太守の**鄧艾**は**司馬師**に言って曰く、

「**孫權**は已に沒し，大臣は未だ附かず。吳の名宗大族は皆な部曲有り，兵を阻(たの)み勢いに仗り，以て命に違うに足る。**諸葛恪**は新たに國政を秉り，而して內に其の主無し，上下を撫恤し以て根基を立てるを念わず，外事を競い，其の民を虐して用い，國之衆を盡（続による、番×）くして，堅城に頓し，死者は萬を數え，禍いを載せ而して歸る，此れ**恪**が罪を獲る之日也。昔**子胥**（伍子胥は呉王闔閭に信任され太子太傅となり、王の死後夫差は殺す）、**吳起**（1 巻周の安王 21 年にあり）、**商鞅**（2 巻、公孫鞅）、**樂毅**（4 巻赧王 36 年にあり）は皆な時の君に任ぜられ，主沒して猶ほ敗れる，況んや**恪**の才は四賢に非ず，而も大いに患うを慮らず，其の亡びるを待つ可き也。」

【諸葛恪の失脚・誅殺】

呉［諸葛恪は建業帰還］八月，吳軍は建業に還り，**諸葛恪**は兵を陳して導從し，歸りて府館（府舍）に入り，即ち中書令の**孫嘿**を召し，聲を厲まして謂って曰く、

「卿等は何ぞ敢えて數々妄りに詔を作るや！」

嘿は惶懼して辭して出で，因りて病し家に還る。

呉［諸葛恪の専政］**恪**が征行之後，曹（選曹）が奏署する所の令長職司を，一に罷め（全員解任）更に選び，

愈々威嚴を治め，罪責する所多く，進見に當たる者は竦息せざるは無し。又た宿衛を改易し，其の親近を用いる。復た兵の嚴するを敕し，青、徐に向かわんと欲す。

呉［孫峻は諸葛恪と一族を謀殺］**孫峻**（216 年-256 年、父は孫恭）は民之多く怨み，衆之嫌う所に因り，**恪**を**吳主**に構えて，雲わく、

「變を為さんと欲す。」

冬，十月，**孫峻**は**吳主**と謀り酒を置きて**恪**を請う。**恪**は將に入らんとする之夜，(5-053p) 精爽擾動（魂が安からざる、胸騒ぎ）し，通夕寐ねず，又た家は數々妖怪有り，**恪**は之を疑う。旦日，宮門に駐車し，**峻**は已に帷中に平を伏す，**恪**が時に入らすして，事洩れるを恐れ，乃ち自ら出でて**恪**を見て曰く、

「**使君**は若し尊體安からざれば，自ら後を須つ可し，**峻**は當に具に**主上**に白す。」

以て**恪**の意を瞢み知らんと欲すなり。**恪**は曰く、

「當に自ら力めて入るべし。」（自ら疾を力めて入りて吳主に見ゆ）

散騎常侍の**張約**、**朱恩**等は密書を**恪**に與えて曰く、

「今日の張設は常に非ず，疑うに他故有らん。」

恪は書を以て**滕胤**に示す，**胤**は**恪**に還るを勸める。**恪**は曰く、

「兒輩は何ぞ能く為さん！正に恐らくは酒食に因りて人に中てん耳。」

恪は入り，劍履して殿に上り，進み謝して坐に還る。酒を設け，**恪**は疑いて未だ飲まず。**孫峻**は曰く、

「**使君**の病は未だ善平（全快）ならず，常服の藥酒有れば，之を取る可し。」

恪は意乃ち安んず。別に繼ぐ所の酒を飲み，（酒は）數行にして，**吳主**は內に還る。**峻**は起ちて廁に如き，長衣を解き，短服を著け，出でて曰く、

「詔有り**諸葛恪**を收めよ。」

恪は驚きて起ち，劍を拔くこと未だ得ず，而して**峻**の刀は交わり下り，**張約**は旁より**峻**を斫り，裁かに左手を傷つけ，**峻**は手に應じて**約**を斫り，右臂を斷つ。武衛之士（武衛將軍が領す）は皆な趨きて殿に上り，**峻**は曰く、

「取る所の者は**恪**也，今已に死す！」

悉く刃を復さ令む（鞘に戻す），乃ち地を除いて更に飲む。**恪**の二子の**竦**、**建**は難を聞き，其の母を載せて（魏に）來奔せんと欲し，**峻**は人をして追いて之を殺さ使む。葦席を以て**恪**の屍を裹み，腰を篾束（割り竹で束ねる）し，之を石子岡（江蘇省金陵道江寧県、現・南京市江寧区）に投ず。又た無難の督の**施寬**を遣わし將軍の**施績**（江陵に在り）、**孫壹**（夏口に在り）の軍に就き，**恪**の弟の奮威將軍の**融**を公安に於いて殺し，其の三子に及ぶ。**恪**の外甥の都鄉侯の**張震**、常侍の**朱恩**は，皆な三族を夷げられる。

呉［臧均は諸葛恪の葬を請う］臨淮の**臧均**は表して**恪**を收め葬すを乞いて曰く、

「震雷電激するも，一朝を崇（終）えず。大風は沖發し，日を極める有るは希なり。然も猶ほ之に繼ぐに雲雨を以てし，因りて以て物を潤す。是れ則ち天地之威，日を經て辰を淹る可からず。**帝王**之怒りは，宜しく情を訖（續による、言乞×）し意を盡すべからず。臣は狂愚（常軌を逸していて愚か）を以て，忌諱（忌み憚る）を知らず，敢えて破滅之罪を冒し以て風雨之會を邀える。伏して念うに故の太傅の**諸葛恪**は，罪は積もり惡は盈ち，自ら夷滅を致し，父子の三首は，市に梟せられて日を積み，觀る者は數萬，詈聲は風を成す。國之大刑は，震わざる所は無く，長老孩幼は，擧く見ざるは無し。人情之品物（衆物）に於けるは，樂しみ極まれば則ち哀しみは生ず，**恪**の貴盛んなるを見るに，世は與に貳ぶものは莫く，身は台輔に處り，中

間年を歴て，今之誅夷は，禽獣に異なる無し，觀訖(おわ)りて情は反し，能く慴然（哀痛する様）たらざらんや！且つ已に死する之人は，土壌と同域なり，鑿掘斫刺も，復た加える所無し。(5-054p) 願わくは聖朝は則を乾坤に稽(かんが)え，怒は旬を極めず，其の鄉邑若しくは故の吏民をして收めるに士伍（秦漢の制、官爵を奪われる者は士伍と為す）之服を以てし，惠むに三寸（薄い板）之棺を以てせ使むべし。昔**項籍**（11 巻漢の高帝五年にあり）は殯葬之施しを受け，**韓信**は收斂（収めて斂葬する）之恩を獲たり，斯れ則ち**漢高**の神明之譽れを發する也。惟だ**陛下**は三皇之仁（元々遺体は原野に放置していたが、後世聖人が棺槨を以てすをいう）を敦くし，哀矜之心を垂れ，國澤をして辜戮（罪し殺す）之骸に加わり，復た已まざる之恩を受け使め、於いて以て遐方に揚聲し，天下を沮勸すれば，豈に大ならず哉！昔**欒布**（12 巻漢高帝 11 年にあり）は命を**彭越**に矯め，臣は竊に之を恨む，先ず**主上**に請わず而して名を專らにし以て情を肆にすれば，其の誅せられざるを得るは，實に幸と為す耳。今臣は敢えて是の表（続は愚情）を章宣し以て天恩を露せざらんや，謹んで伏して手書し，冒昧（其の死罪を冒昧す）して陳聞す，乞う聖明哀察せよ。」

是に於いて**呉主**及び**孫峻**は**恪**の故の吏に斂葬を聽す。

呉 蜀 **［諸葛恪の危うさの指摘］** 初め，**恪**は少(わか)くして盛名有り，**大帝**は深く之を器重しとし，而して**恪**の父の**瑾**は常に以て戚(うれい)と為し，曰く、

「家を保つ之主に非ざる也。」

父の友の奮威將軍の**張承**も亦た以為えらく、

「**恪**は必ず**諸葛**氏を敗らん。」

陸遜は嘗て**恪**に謂って曰く、

「我が前に在る者は、吾は必ず之を奉じて同じく升り，我の下に在る者は則ち之を扶接す。今君を觀るに氣は其の上を陵(しの)ぎ，意は下を蔑す，德を安んずる之基に非ざる也。」

漢の侍中の**諸葛瞻**は，**亮**之子也。**恪**は再び淮南を攻め，越巂太守の**張嶷**は**瞻**に書を與えて曰く、

「**東主**（呉主）は初めて崩じ，**帝**(呉主孫亮)は實に幼弱なり，太傅（諸葛恪）は寄托之重を受けて，亦た何ぞ容易ならん！親しくして**周公**之才有るすら，猶ほ**管**、**蔡**の流言之變有り，**霍光**（23 巻漢昭帝元鳳元年にあり）は任を受けるも，亦た燕、蓋、上官の逆亂之謀有り，成、昭之明に賴り以て斯の難を免かれる耳。昔每に聞く、**東主**は殺生賞罰は，下人に任せず，又た今沒するに垂々とする之命を以て，卒に太傅を召し，屬するに後事を以てす，誠に實に慮る可し。加えるに呉楚の剽急（軽疾性急。周亞夫曰く、呉楚は飄軽なり。太史公曰く、楚の俗は飄軽にして發怒し易し。漢以来この謂いあり）なるは，乃ち昔の記する所，而るに太傅は**少主**を離れ，敵庭を履むは，恐らくは良計長算に非ざる也。東家の綱紀は肅然とし，上下は輯睦すると雲うと雖も、百に一失有れば，明者之慮りに非ざる也。古を取りて今に則(のり)とすれば，今は則ち古也，郎君（漢以来門下生で率ね明門の子弟）が忠言を太傅に進むるに非ざるよりは，誰か復た言を盡くす者有らん邪！軍を旋し農を廣め，務めて德惠を行えば，數年之中には，東西並びに舉がらんことを，實に晩(おそ)からずと為す，願わくは深く采察すべし！」

恪は果たして此を以て敗る。

【呉は孫峻が実権掌握】

呉 **［孫峻の專政］** 呉の群臣は共に議して上奏し，**孫峻**を推して太尉と為し，**滕胤**を司徒と為さんとす。(5-055p) **峻**に媚する者有りて言って曰く、

「萬機は宜しく公の族に在り，若し**承嗣**(滕胤の字)を亞公（司徒は位は太尉に亞す）と為せば，聲名は素より重く，衆心の附く所，量る可からざる也。」

乃ち**峻**を表して丞相、大將軍と為し，中外諸軍事を督さしめ，又た御史大夫を置かず。是に由りて士人は失望す。**滕胤**の女は**恪**の子の**竦**の妻為り，**胤**は此を以て位を辭す。**孫峻**は曰く、
「**鯀**、**禹**は罪相い及ばず（舜は鯀を殛して、其の子の禹を賞す），**滕侯**は何為れぞ！」
峻は**胤**と內は沾洽（感情相融和する）せずと雖も，而も外は相い苞容し，**胤**の爵を進めて高密侯とし，事を共にすること前の如し。
呉［**孫峻の專政**］齊王の**奮**は**諸葛恪**の誅せられるを聞き，下りて蕪湖に住まり，建業に至りて變を觀んと欲す。傅相の**謝慈**等は諫め，**奮**は之を殺し，坐して廢せられて庶人と為り，章安（會稽郡の県、浙江省會稽道臨海県の南東、台州市臨海市）に徙される。

呉［**孫和の粛清、子の孫皓は命拾い**］南陽王の**和**の妃の**張氏**は，**諸葛恪**之甥也。是より先に**恪**は都を徙す之意有り，武昌宮を治め使め，民間の或は言う、
「**恪**は**和**を迎えて之を立てんと欲す。」
恪の誅せられるに及び，丞相の**峻**は此に因りて**和**の（南陽王の）璽綬を奪い，新都に徙し，又た使者を遣わして追いて死を賜る。初め，**和**の妾の**何氏**は子の**皓**を生み，諸姬の子の**德**、**謙**、**俊**あり。**和**は將に死せんとし，**張妃**と別れ，妃は曰く、
「吉凶は當に相い隨うべし，終に獨り生きず。」
亦た自殺す。**何姬**は曰く、
「若し皆な從って死ねば，誰か當に孤を字うべき！」
遂に**皓**及び其の三弟を撫育し，皆な賴りて以て全くするを獲たり。

高貴鄉公上・邵陵厲公下正元元年（甲戌，２５４年）

（高貴鄉公は諱は孫髦、字は彦士、文帝の孫の東海の定王霖の子。正始五年に高貴鄉公、高貴鄉は郯県に属す）
（この年は嘉平六年。冬十月に高貴鄉公は方めて正元と改元す。資治通鑑はこの年を以て高貴鄉公に繫ぐ、因って正元元年と書す）

【司馬師の粛清】

■［**司馬師は李豐・夏侯玄らを誅殺**］春，二月，中書令の**李豐**を殺す。初め，**豐**の年は十七、八，已に清名有り，海內は翕然として之を稱す。其の父の太僕の**恢**は其の然るを願わず，敕して閉門して客を斷た使む。**曹爽**は專政し（前卷正始八年九年），**司馬懿**は疾を稱して出でず，**豐**は尚書僕射為り，二公の間に依違し，故に**爽**と同じく誅せられず。**豐**の子の**韜**，選を以て**齊長公主**（帝の姉妹を長公主という、齊王は明帝の女）に尚す。**司馬師**は政を秉り，**豐**を以て中書令と為す。是の時，太常の**夏侯玄**は天下に重名有り，**曹爽**の親故（俗は親）なるを以て，勢任（権勢の任）に在るを得ず，居常は怏怏たり。**張緝**（東莞より召されるは前卷嘉平四年にあり）は**后**の父なるを以て郡を去りて家居し，亦た意を得ず。**豐**は皆な之と親善す。**師**は**豐**を擢用すると雖も，**豐**の私心は常に**玄**に在り。**豐**は中書に在ること二歲，**帝**は數々獨（続は無し）り**豐**を召し與に語り，說く所を知らず。**師**は其の己を議すを知り，**豐**に請いて相い見て以て**豐**を詰り，**豐**は實を以て告げず。**師**は怒り，刀鐶（刃の柄の上に鎧有り）を以て之を築殺（衝き殺す）し，屍を送りて廷尉に付け，遂に**豐**の子の**韜**及び**夏侯玄**、**張緝**等を收め皆な廷尉に下し，**鐘毓**（鍾会の兄）は案治し，云わく、
「**豐**は黃門監（漢に黃門令あり、宦官の任、魏は黃門監を置く）の**蘇鑠**，永寧署令（永寧宮は魏の太后の宮、宦官の任）の**樂敦**，冗從僕射の**劉賢**等と謀りて曰く、(5-056p)『貴人を拜するの日，諸營兵は皆な門（宮城の門）に屯し，

陛下は軒に臨み（檐宇の本を軒といい、御座を促して前みて殿階に臨むという），此に因りて同じく**陛下**を奉じ，群僚人兵を將いて，就きて大將軍を誅せん。**陛下**が儻し人に從わざれば，便ち當に劫かして將い去るべき耳。』」

又た云わく

「謀りて**玄**を以て大將軍と為し，**緝**を驃騎將軍と為さんとす。**玄**、**緝**は皆な其の謀を知れり。」

庚戌（46-25+1=２２日），**韜**、**玄**、**緝**、**纂**、**敦**、**賢**を誅し，皆な三族を夷ぐ。

■<u>［夏侯霸の泰然自若］</u>**夏侯霸**之蜀に入る也（前巻嘉平元年にあり），**玄**を邀えて之と俱にせんと欲し，**玄**は從わず。**司馬懿**の薨じるに及び，中領軍の高陽の**許允**は**玄**に謂って曰く、

「復た憂うる無し矣！」

玄は歎いて曰く、

「**士宗**（許允の字），卿は何ぞ事を見ざる（事を覚らず）乎！此の人は猶ほ能く通家の年少を以て我を遇せり，**子元**（司馬師の字）、**子上**（司馬昭の字）吾を容れざる也。」

下獄するに及び，**玄**は肯えて辭を下さず，**鍾毓**は自ら臨みて之を治す。**玄**は正色して**毓**を責めて曰く、

「吾は何の罪にか當たるや！卿は令史（漢以来公府に令史有り、廷尉に獄吏有るのみ。玄は蓋し毓を責めて九卿の身を以て、自ら臨みて我を治するは、是れ公府の令史と為りて人を責めるなりという）と為り人を責める也，卿は便ち吾が為に作れ！」

毓は**玄**が名士にして，節高く，屈す可からず，而して獄は當に竟（終決）うべきを以て，夜、為に辭を作り（為に獄辭を作り），事と相い附か令め（案ずる所の事と相附合せしむ），流涕して以て**玄**に示す。**玄**は視て，之を頷き而して已む。東市に就くに及びて，顔色は變わらず，舉動は自若なり。

■<u>［李翼は共に死す者を知らず］</u>**李豐**の弟の**翼**は，兗州刺史為り，**司馬師**は遣使して之を收める。**翼**の妻の**荀氏**は**翼**に謂って曰く、

「中書の事發（発覚）し，詔書の未だ至らざるに及びて吳に赴く可し，何為れぞ坐して死亡を取らん！左右の共に同じく水火に赴く可き者は誰と為すや？」

翼は思いて未だ答えず，妻は曰く、

「君は大州に在り，與に死生を同じくす可き者を知らず，去ると雖も亦た免れず！」

翼は曰く、

「二兒は小なり，吾は去らず，今但だ從坐して身死する耳，二兒は必ず免れん。」（吳に奔れば禍は子に及ぶが、一身で済むの意味）

乃ち止まり，死す。

■<u>［郭沖は内実有り、外観無し］</u>初め，**李恢**は尚書僕射の**杜畿**及び東安太守の**郭智**と善く，**智**の子の**沖**は，内實有り而して外觀無く，州裡は稱せざる也。**沖**は嘗て**李豐**と俱に**畿**を見，既に退き，**畿**は歎じて曰く、

「**孝懿**（李恢の字）は子無し。徒に子無きに非ず，殆んど將に家無からんとす。**君謀**（郭智の字）は死せずと為す也，其の子は其の業を繼ぐに足る。」

時の人は皆な**畿**を以て誤まけりと為す。**豐**の死するに及び，**沖**は代郡（続による、君×）の太守と為り，卒に父の業を繼ぐ。

■<u>［傅嘏は何晏等と交わらず］</u>正始中，**夏侯玄**、**何晏**、**鄧颺**は俱に盛名有り，尚書郎の**傅嘏**に交わらんと欲し，**嘏**は受けず。**嘏**の友人の**荀粲**は怪しみ而して之に問い，**嘏**は曰く、

「**太初**（夏侯玄の字）は志は其の量は大にして，能く虚聲に合し、(5-057p) 而して實才は無し。**何平叔**（何晏の字）言は遠く而して情は近く，辯を好み而るに誠は無し，所謂利口（論語の陽貨篇に孔子曰く、利口の邦家を覆

すを悪むと）にして邦國を覆す之人也。**鄧玄茂**（鄧颺の字）は為す有り而して終り無く，外は名利を要め，內は關鑰無く，同を貴び異を惡み，多言に而して前むを妒む。言多くして釁も多く，前むを妒めば親無し（己に勝るを忌み、これに親しむ者無し）。吾を以て此の三人の者を觀るに，皆な將に家を敗らん。之を遠ざけても猶ほ禍いの及ぶを恐れる，況んや之を暱する乎！」

誾は又た**李豐**と善からず，同志に謂って曰く、

「**豐**は偽りを飾り而して多く疑う，小智を矜り而して權利に昧く，若し機事に任ずれば，其の死せんこと必ずなり矣！」

■辛亥（47-25+1=２３日），大赦す。

■三月，**皇后**の**張氏**を廢す，**夏**，四月，**皇后**の**王氏**を立てる，奉車都尉の**夔之**（之の字は衍なり）の女也。

蜀狄道の**長李簡**は密書して降を漢に請う。六月，**姜維**は隴西を寇す。

■［許允の粛清］中領軍の**許允**は素より**李豐**、**夏侯玄**と善し。秋，**允**を鎮北將軍と為し、節を假し、河北諸軍事を都督せしむ。**帝**は**允**が當に出でるを以て，詔して群臣を會し，**帝**は特に**允**を引いて以て自ら近づく。**允**は**帝**と別れるに當たりて，涕泣して歔欷（啜り泣く）す。**允**は未だ發せず，有司は奏す、

「**允**は前に官物を放散す」

と，收めて廷尉に付け，樂浪に徙し，未だ至らずして，道に死す。（樂浪が魏支配下にある）

呉［桓慮の孫峻謀殺失敗］呉の**孫峻**は驕矜淫暴にして，國人は目を側つ。司馬の**桓慮**は**峻**を謀殺して，太子の**登**之子の呉侯の**英**を立てんとす。克たず，皆な死す。

【司馬師の簒奪強攻策】

■［司馬昭誅殺計画］**帝**は**李豐**之死を以て，意は殊に平かならず。安東將軍の**司馬昭**は許昌に鎮し，詔して之を召して**姜維**を擊た使む。九月，**昭**は兵を領して入りて見え，**帝**は平樂觀（洛陽城の西）に幸し以て軍の過ぎるに臨む。左右は**帝**に勸む、

「**昭**の辟するに因りて，之を殺し，兵を勒して以て大將軍を退くべし」

已に詔を前に書し，**帝**は懼れ，敢えて發せず。

■［司馬師は皇帝廃嫡］**昭**は兵を引いて入城し，大將軍の**師**は乃ち**帝**を廢さんと謀る。甲戌（10+60-52+1=１９日），**師**は**皇太后**令（群臣を召すに矯めて行う）を以て群臣を召し會議し，以わく、

「**帝**の荒淫は度無く，倡優（歌舞する女）を褻近（なれ近づく）す，以て天緒を承ける可からず。」

群臣は皆な敢えて違い莫し。乃ち奏して**帝**の璽綬を收め，簒に齊に歸す。**郭芝**（太后の從父）をして入りて**太后**に白さ使め，**太后**は方に**帝**と對坐し，**芝**は**帝**に謂って曰く、

「大將軍は**陛下**を廢し，彭城王の**據**（文帝の子）を立てんと欲す！」

帝は乃ち起ち去る。**太后**は悅ばず。**芝**は曰く、

「**太后**は子有りて教える能わず，今大將軍の意は已に成り，又た兵を外に勒して以て非常に備える，但だ當に旨に順うべし，將た復た何をか言わん！」

太后は曰く、

「我は大將軍を見て，口ずから說く所有らんと欲す。」

芝は曰く、

「何ぞ見る可けん邪！但だ當に速かに璽綬を取るべし！」

太后の意は折れ，乃ち傍侍御（常時太后に付く侍御）を遣わして璽綬を取らしめ坐側に著く。**芝**は出でて**師**に報ず，**師**は甚だ喜ぶ。(5-058p) 又た使者を遣わして**帝**に**齊王**の印綬を授けしめ，出でて西宮に就かしむ。**帝**（年 23）は**太后**と涕を垂れ而して別れ，遂に王車（皇帝の車でなく、諸王の車）に乗り，太極殿の南より出で，群臣の送る者は數十人，**司馬孚**は悲しみて自ら勝たず，餘も流涕するもの多し。

■［高貴鄉公を迎える］**師**は又た使者をして璽綬を**太后**に請わ使む。**太后**は曰く、

「彭城王は，我之季叔也，今來たりて立てば，我は當に何くに之かん！且つ**明皇帝**は當に永く嗣を絕つべき乎？高貴鄉公（文帝の黃初三年に初めて制して王の庶子を封じて鄉公と為し、嗣王の庶子を侯公と為し、侯公の庶子を亭伯という）は，**文皇帝**之長孫，**明皇帝**之弟の子なり。禮に於いて，小宗（支子の子の各々その父を宗とする）は大宗（世嫡）に後たる之義有り，其れ詳しく之を議せよ。」（禮に太后は嗣無き時は選びて支子を立てて太宗を継かしむ）

丁丑（13+60-52=２２日），**師**は更に群臣を召し，**太后**令を以て之に示し，乃ち定めて**高貴鄉公**の**髦**を元城（直隷省大名道大名県、現・邯鄲市大名県）より迎える。**髦**者，東海の定王の**霖**之子也，時に年は十四，太常の**王肅**をして節を持して之を迎え使む。**師**は又た（人をして）璽綬を（太后に）請わ使め，**太后**は曰く、

「我は**高貴鄉公**の小時を見て之を識る，我は自ら璽綬を以て手ずから之を授けんと欲す。」

冬，十月，己丑（25-22+1=４日），**高貴鄉公**は玄武館（洛陽城の北）に至り，群臣は奏して前殿に捨せんと請う，**公**は**先帝**の舊處なるを以て，避けて西廂に止まる。群臣は又た法駕を以て迎えんと請い，**公**は聽さず。庚寅（26-22+1=５日），**公**は洛陽に入り，群臣は迎えて西掖門の南に拜す，**公**は輿を下り答拜し，儐者（贊導者）は請いて曰く、

「儀に拜せず。」（儀に於いて答拜すべからず）

公は曰く、

「吾は人臣也。」

遂に答拜す。止車門に至り輿を下る，左右は曰く、

「舊は輿に乘りて入る。」

公は曰く、

「吾は**皇太后**の征（続は徴）を被る，未だ為す所を知らず。」（皇帝にはふさわしくないとの意味）

遂に歩いて太極東堂に至り，**太后**を見ゆ。其の日，**皇帝**に太極前殿に於いて即位す，百僚陪位者は皆な欣欣焉たり。大赦し，改元す。**齊王**の為に宮を河內に築く。

蜀［姜維は狄道に進出］漢の**姜維**は狄道（続による、鍬道×）より進んで河間（河關に作るべし、河關県は隴西郡に属す、狄道の西にあり）、臨洮を拔く。將軍の**徐質**は輿に戰い，其の蕩寇將軍の**張嶷**を殺し，漢兵は乃ち還る。

■［曹爽誅殺で、文欽・毌丘儉は自ら不安］初め，揚州刺史の**文欽**は，驍果は人に絕し，**曹爽**は（続は其の+）鄉里の故なるを以て之を愛す。**欽**は**爽**の勢いを恃み，陵傲する所多し。**爽**の誅せられる（前卷嘉平元年にあり）に及び，**欽**は已に內に懼れ，又た好みて虜級（捕虜と斬首）を增し以て功賞を邀め，**司馬師**は常に抑え，是に由りて怨望す。鎮東將軍の**毌丘儉**は素より**夏侯玄**、**李豐**と善く，**玄**等が死して，**儉**も亦た自ら安んぜず，乃ち計を以て厚く**欽**を待つ。**儉**の子の治書侍御史の**甸**は**儉**に謂って曰く、

「大人は方岳（続は方嶽、古の天子は四方に巡狩するときにその方面の諸侯は、各々方嶽の下に会朝す、堯舜に四岳の官有り。毌丘儉も鎮東將軍として一方面に任じる）の重任に居り，(5-059p) 國家は傾覆し而して晏然として自ら守る，將に受四海之責めを受ける矣！」

儉は之を然りとす。

邵陵厲公下正元二年（乙亥，２５５年）

【文欽・毌丘儉の反乱】

■［文欽・毌丘儉は壽春に挙兵］春，正月，**儉**、**欽**は**太后**の詔を矯め，兵を壽春に起こし，檄を州郡に移し，以て**司馬師**を討つ。又た表して言う、

「相國の**懿**は忠正なり，社稷に大勳有り，宜しく宥して後世に及ぶべし，請う**師**を廢して，侯を以て第に就かしめ，弟の**昭**を以て之に代わらしめよ。太尉の**孚**は忠孝にして小心なり，護軍の**望**は，忠公にして事を親らにす，皆な宜しく親寵し，授けるに要任を以てすべし。」

望は，**孚**之子也。**儉**は又た遣使して鎮南將軍の**諸葛誕**を邀えしめ，**誕**は其の使いを斬る。**儉**、**欽**は五六萬の衆を將して淮を渡り，西して項に至る。**儉**は堅く守り，**欽**をして外にありて遊兵と為ら使む。

■［司馬師は自ら出陣決意］**司馬師**は計を河南尹の**王肅**に問い，**肅**は曰く、

「昔**關羽**は**于禁**を漢濱に虜にし，北に向かいて天下を爭う之志有り，後に**孫權**（68 巻漢の獻帝建安 24 年に有り）は襲いて其の將士家屬を取り，**羽**の士衆は一旦瓦解す。今淮南の將士の父母妻子は皆な內州に在り，但だ急に往きて御衛し，前むを得ざら使めよ（儉、欽の衆を禦ぎて進むを得ざらしめ、又その家族を衛る），必ず**關羽**の土崩之勢い有らん矣。」

時に**師**は新たに目瘤を割き，創は甚だしく，或は以為く、

「大將軍は宜しく自ら行くべからず，太尉の**孚**を遣わして之を拒むに如かず。唯だ**王肅**と尚書の**傅嘏**、中書侍郎の**鐘會**は**師**に自ら行くを勸め，**師**は疑いて未だ決せず。**嘏**は曰く、

「淮、楚の兵は勁（つよ）く（壽春は呉に対する淮南の要衝），而して**儉**等は力を負（たの）みて遠く鬥う，其の鋒は未だ當たるに易からざる也。若し諸將は戰いて利鈍有り，大勢一たび失えば，則ち公の事は敗れん矣。」

師は蹶然（急遽起つ）として起ちて曰く、

「我は請う疾を輿（よ）して而して東せん。」

戊午（54-50+1=５日），**師**は中外（中軍と城外の諸營兵）の諸軍を率いて以て**儉**、**欽**を討ち，弟の**昭**を以て中領軍を兼ね，留まりて洛陽に鎮せしめ，三方（東西北）の兵を召して陳、許に會せしむ。

■［司馬師の作戦］**師**は計を光祿勳の**鄭袤**に問い，**袤**は曰く、

「**毌丘儉**は好く謀り而して事情に達せず，**文欽**は勇に而して算無し。今大軍が其の不意に出れば，江、淮之卒は，鋭に而して固く能わず，宜しく溝を深くし壘を高くし以て其の氣を挫（くじ）けば，此れ亞夫之長策（漢の周亞夫は壁を堅くして以て呉楚を破る）也。」

師は善しと稱す。

■［王基は急速進軍を薦める］**師**は荊州刺史の**王基**を以て行監軍（魏晉の制は、持節都督將軍を上とし、假節都督、假節監諸軍、假節行監軍が次ぐ）と為し，節を假し，許昌（魏は漢の禪譲を受けて別宮を設け、重兵を屯す）の軍を統べしむ。

基は**師**に言って曰く、

「淮南之逆は，吏民が亂を思うに非ざる也，**儉**等は誑誘迫脅し，目下之戮を畏れ，是を以て尚ほ屯聚する耳。若し大兵一たび臨めば，必ず土崩瓦解せん，**儉**、**欽**之首は朝を終えず而して軍門に致さん矣。」

師は之に從う。**基**を以て前軍と為し，既に而して復た敕して**基**を停駐せしむ。**基**は以為く、

「**儉**等は軍を舉げれば以て深く入るに足る，而るに久しく進まざる者は，（5-060p）是れ其の詐偽は已に

露われ，衆心は疑沮すれば也。今威形を張り示し以て民望に副わず，而して軍を停め壘を高くするは，畏懦に似る有り，用兵之勢いに非ざる也。若し**儉**、**欽**が民人を虜略し以て自ら益し，又た州郡の兵の家が賊の得る所と為る者は，更に離心を懐き，**儉**等の迫脅する所の者は，自ら罪の重きを顧み，敢えて復た還らず，此れ兵を無用之地に錯き而して奸宄之源を成すと為す，吳寇が之に因れば，則ち淮南は國家之有に非ず，譙、沛、汝、豫（潁川）は危うく而して安からず，此れ計之大失也。軍は宜しく速やかに進みて南頓（汝南郡の県、河南省開封道項城県、現・周口市項城市）に據るべし，南頓には大邸閣有り，計るに軍人四十日の糧に足らん。堅城を保ち，積穀に因り，人に先だちて人之心を奪う有るは，此れ賊を平らげる之要也。」

基は屢々請い，乃ち聽き，進みて隱水（南頓県で潁に入る）に據（続による、據水×）る。

■［遂に南頓に據る］閏月（続は二月閏月とするが、一月閏月のはず、元嘉暦二月），甲申（20-20+1=１日），**師**は隱橋（続による、水隱橋?）に次り，**儉**の將の**史招**、**李續**は相い次いで來降す。**王基**は復た**師**に謂って曰く、

「兵は拙速を聞き，未だ巧を為す（続により補充）之久しきを覩（続による、睹×）ざる也（この二句は孫子の言）。方今外に強寇有り，內に叛臣有り，若し時に決せざれば，則ち事之深淺は未だ測る可からざる也。議者は多く言う、將軍は持重す。將軍持重するは，是也。軍を停めて進まざるは，非也。持重するは，得（続は行）ざる之謂に非ざる也，進み而して犯す可からざる耳。今壁壘を保ち積實を以て虜に資し而して遠く軍糧を運ぶは，甚だ計に非ざる也。」

師は猶ほ許さず。**基**は曰く、

「將の軍に在りては，君令をも受けざる所有り（孫子などの言）。彼得れば則（続は亦）ち利し，我得れば亦た利する（孫子の言），是れ爭地と謂い，南頓は是れ也。」

遂に輒ち進みて南頓に據り，**儉**等は項（項城）より亦た往きて爭わんと欲し，發して十餘里，**基**の先ず到るを聞き，乃ち復た還りて項を保つ。

■癸未（一月 19+60-50=２９日?順序逆），征西將軍の**郭淮**は卒す，雍州刺史の**陳泰**を以て之に代わらしむ。

■吳［吳の介入、毌丘儉・文欽は計窮まる］吳の丞相の**峻**は驃騎將軍の**呂據**、左將軍の會稽の**留贊**を率いて壽春を襲い，**司馬師**は諸軍に命じて皆な壁を深くし壘を高くし，以て東軍（青州・徐州・兗州の軍）之集まるを待つ。諸將は軍を進めて項を攻めんと請う，**師**は曰く、

「諸軍（諸君につくるべし）其の一を得（続は知）て，未だ其の二を知らず。淮南の將士は本々反く志無し，**儉**、**欽**は說き誘い之と與に事を擧げ，謂えらく遠近は必ず應ぜんと。而るに事起こる之日，淮北（豫州・兗州）は從わず，**史招**、**李繼**は前後瓦解す，內は乖き外は叛き，自ら必ず敗れんと知る。困獸は鬥わんことを思い，速かに戰えば更に其の志を合わす。必ず克たんと雲うと雖も，人を傷つけること亦た多し。且つ**儉**等は將士を欺き誑かし，詭變萬端なり，小しく與えて持久すれば，詐情は自ら露われん，此れ戰わず而して克つ之術也。」

乃ち**諸葛誕**を遣わして豫州の諸軍を督し，**(5-061p)** 安風（安徽省淮泗道霍丘県の西南 130 里、六安市霍邱県）より壽春に向かわしむ。征東將軍の**胡遵**をして青、徐の諸軍を督して譙、宋（梁国の地、睢陽、故の宋の都）之間に出で，其の歸路を絕たしむ。**師**は汝陽（汝南郡の県、河南省開封道商水県の西北、現・周口市商水県）に屯す。**毌丘儉**、**文欽**は進みて鬥うを得ず，退きては壽春の襲われんことを恐れ，計は窮まり為す所を知らず。淮南の將士の家は皆な北に在り，衆心は沮み散り，降る者は相い屬き，惟だ淮南の新附農民は之が用を為す。

■［文鴦の急襲、司馬師は目突出して苦しむ］**儉**之初めて起つや，健步（健脚の飛脚）を遣わして書を繼ぎて兗州に至らしめ，兗州刺史の**鄧艾**は之を斬り，兵萬餘人を將して，兼道して前進し，先ず樂嘉（河南省開封道項城県の北、現・周口市項城市）城に趨き，浮橋を作りて以て**師**を待つ。**儉**は**文欽**の將兵をして之を襲わ使む。

師は汝陽より兵を潜めて**艾**に樂嘉に就き，**欽**は猝に大軍を見，驚愕して未だ為す所を知らず。。**欽**の子の**鴦**は，年十八，勇力は人に絕す，**欽**に謂って曰く、
「其の未だ定まらずに及び，之を撃ちて，破る可き也。」
是に於いて分けて二隊と為し，夜夾みて軍を攻める。**鴦**は壯士を率いて先ず至りて鼓噪し，軍中は震擾す。**師**は驚駭す。病む所の目は突出し，衆の之を知るを恐れ，被を嚙み（痛みをこらえて）皆な破る。**欽**は期を失いて應ぜず，（夜の）明けるに會し，**鴦**は兵盛んなるを見，乃ち引いて還る。**師**は諸將に謂って曰く、
「賊は走る矣，之を追う可し！」
諸將は曰く、
「**欽**の父子は驍猛なり，未だ屈する所有らず，何の苦しみ而して走らん？」
師は曰く、
「夫れ一鼓して氣を作り（左傳にあり、魯の曹劌の言），再び而して衰える。**鴦**は鼓噪して應を失い，其の勢いは已に屈す，走らずして何を待つや！」
欽は將に引き而して東せんとし，**鴦**は曰く、
「先ず其の勢いを折らざれば，<u>去る（続により補充）</u>を得ず也。」
乃ち驍騎十餘と與に鋒を摧き陳を陷し，向う所皆な披靡し，遂に引いて去る。**師**は左長史の**司馬班**をして驍將八千を率いて翼し（左右両翼を広げる）而して之を追わ使め，**鴦**は匹馬を以て數千騎の中に入り，輒ち百餘人を殺傷し，乃ち出で，此の如き者は六七，追騎は敢えて逼るは莫し。
■<u>［尹大目は文欽を説得せんとす］</u>殿中の人の**尹大目**（時に殿中大尉）は小にして**曹氏**の家奴と為り，常に**天子**の左右に在り，**師**は將いて與に俱に行き，**大目**は**師**の一目の已に出でるを知り，啟して云（続は曰）わく、
「**文欽**は本是れ明公の腹心なり，但だ人の誤られる所と為る耳。又た**天子**の鄉里（文欽は譙の人）にして，素より**大目**と相い信じ，乞う公の為に追いて之を解語し，還た公と好みを復さ令めん。」
師は之を許す。**大目**は單身にして大馬に乘り，鎧冑を被り，**欽**を追い，遙かに相い與に語る。**大目**は心は實に**曹氏**の為にせんと欲し，謬りて言わく、
「君侯は何を苦しみて復た數日の中を忍ぶ可からざる也！」（数日待てば、司馬師の病は重篤という示唆）
欽をして其の旨を解（覚る）せ使めんと欲し。**欽**は殊（た）えて悟らず，乃ち更に厲聲して**大目**を罵りて曰く、
「汝は**先帝**の家人なり，報恩を念わず，反って**司馬師**と逆を作る，上天を顧みず，天は汝を祐（たす）けず！」
弓を張り矢を傅（つ）け**大目**を射んと欲す。**大目**は涕泣して曰く、
「世事は敗れたり矣，**(5-062p)** 善く自ら努力せよ！」
■<u>［文欽父子投降、毌丘儉は殺される］</u>是の日，**毌丘儉**は**欽**の退くを聞き，恐懼し，夜走り，衆は遂に大いに潰える。**欽**は還りて項に至り，孤軍にして繼ぐ無きを以て，自ら立つ能わず，壽春に還らんと欲す。壽春は已に潰え，遂に吳に奔る。吳の**孫峻**は東興に至り，**儉**等の敗れるを聞き，壬寅（38-20+1=１９日），進みて橐皐（安徽省安慶道巢県拓皐鎮、現・合肥市巢湖市柘皐鎮）に至る，**文欽**の父子は軍に詣りて降る。**毌丘儉**は走り，慎縣（汝陰郡の県、安徽省淮泗道潁上県西北、現・阜陽市潁上県）に至る比（続は北、比が正しい）おい，左右の人兵は稍く**儉**を棄てて去り，**儉**は水邊の草中に藏（かく）れる。甲辰（40-20+1=２１日），安風の津の民の**張屬**は就きて**儉**を殺し，首を京師に傳え，**屬**を封じて侯と為す。**諸葛誕**は壽春に至り，壽春の城中の十餘萬口は，誅されるを懼れ，或は山澤に流迸し，或は散走して吳に入る。詔して**誕**を以て鎮東大將軍、儀同三司と為し，揚州諸軍事を都督せしむ。**毌丘儉**の三族を夷ぐ。

■［毋丘儉の孫女に嫁ぎ孕めるの処遇を律令に著す］**儉**の黨の七百餘人は獄に繫がれ，侍御史の**杜友**は之を治し，惟だ首事者（事を首事する者）十餘人を誅し，餘は皆な奏して之を免す。**儉**の孫女は**劉氏**に適き，死に當し，孕みたるを以て廷尉に系がる。司隷主簿（魏晋の制で列卿には各々丞・功曹・主簿・五官等あり）の**程鹹**は議して曰く、

「女は、人に適く者は，若し已に產育すれば，則ち他家之母と成る（之を誅するは），防（防禁）に於いては則ち奸亂之源を懲らすに足らず，情に於いては則ち孝子之恩を傷つける。男は罪を他族に遇わざるに，而るに女獨り戮に二門（父母の家と夫の家）に嬰（かか）るは，女弱（女は父母に従い、夫に従う弱い立場）を哀矜し、法制を均しくする所以之大分に非ざる也。臣は以為うに室に在る之女は，父母之刑に從う可し。既に醮（嫁する、酌みてしかも酬酢する無きを醮という、『説文解字』の段玉裁の注では冠礼・娶妻に用いる酒礼の一方法、その別儀として祭りの意味である。また、醮は天神に対する祭祀や饗食。中国古代の神は多く星辰を居所とすると考えられたことから、醮は必然的に星辰を祀り、これに酒肴を供えることになる）する之婦は，夫家之戮に從わ使むべし。」

朝廷は之に從い，仍って律令に著す。

【司馬師の病死】

■［司馬師は許昌帰還］舞陽の忠武侯の**司馬師**の疾は篤く，許昌に還り，中郎將の參軍事の**賈充**を留めて諸軍事を監ぜしむ。**充**は，**逵**（武帝・文帝に事える）之子也。

■［司馬師卒、司馬昭が引き継ぐ］衛將軍の**昭**は洛陽より往きて**師**を省し，**師**は**昭**をして諸軍を總統せ令む。辛亥（47-20+1=２８日），**師**は許昌に卒す。中書侍郎の**鐘會**は**師**に從いて密事を典知し，中詔（詔は中より出て上意なり。この時皆司馬氏の意を以て行う。この詔は禁中の意に出る）して尚書の**傅嘏**に敕し，東南の新たに定まるを以て，權（かり）に衛將軍の**昭**を留めて許昌に屯し內外之援を為し，**嘏**をして諸軍を率いて還さ令む。**會**は**嘏**と謀り，**嘏**をして表上せ使め，輒ち**昭**と俱に發し，還りて洛水の南に到り屯住す。二月（元嘉曆三月），丁巳（53-49+1=５日），詔して**司馬昭**を以て大將軍と為し、尚書事を錄せしむ。**會**は是に由りて常に自ら矜（ほこ）る之色有り，**嘏**は之を戒めて曰く、

「子の志は其の量を大にし，而も勳業は為し難き也，慎しまざる可けん哉！」

呉呉の**孫峻**は**諸葛誕**の已に壽春に據るを聞き，乃ち兵を引いて還る。**文欽**を以て都護、鎮北大將軍、幽州牧と為す。**(5-063p)**

■三月（元嘉曆四月、元嘉曆では五月に閏月あり），皇后の**卞氏**を立てて，大赦す。**后**は，**武宣皇后**の弟の**秉**之曾孫女也。

呉［孫儀の謀反ならず］秋，七月，呉の將軍の**孫儀**、**張怡**、**林恂**は**孫峻**を殺さんと謀り，克たず，死者は數十人。**全公主**は**朱公主**を**峻**に譖りて，曰く、

「**儀**と同じく謀るなり」。

峻は遂に**朱公主**（孫權の女、朱據につく）を殺す。

呉［廣陵城建設失敗］**峻**は衛尉の**馮朝**をして廣陵（魏の廣陵郡は淮陰に治す、漢の廣陵故城は廢棄。江蘇省淮揚道江都県、現・揚州市広陵区・江都区）に城きづか使め，功費は甚だ衆く，朝を擧げて敢えて言う莫く，唯だ**滕胤**は諫めて之を止めるも，**峻**は從わず，功は卒に成らず。

【姜維の侵略を撃退】

蜀［姜維は狄道に進出］漢の**姜維**は復た軍を出すを議し，征西大將軍の**張翼**は廷爭して，以為く、
「國は小にして民は勞す，宜しく武を黷(けが)すべからず。」
維は聽かず，車騎將軍の**夏侯霸**及び**翼**を率いて同じく進む。八月，**維**は數萬人を將して枹罕に至り，狄道に趨く。

蜀■［王經は羌維に破れる］征西將軍の**陳泰**は雍州刺史の**王經**に敕して進みて狄道に屯し，**泰**の軍の到るを須ち，東西勢いを合わせて乃ち進ましむ。**泰**は陳倉に軍し，**經**が統べる所の諸軍は故關（漢の邊關、洮水の西、甘肅省蘭山道旧蘭州府内、現・蘭州市）に於いて漢人と戰い利あらず，**經**は輒ち洮水を渡る。**泰**は以えらく、**經**は堅く狄道に據らず，必ず他の變有らんと，諸軍を率いて以て之に繼ぐ。**經**は已に**維**と洮西に戰い，大敗し，萬餘人を以て還り狄道城を保つ，餘は皆な奔散し，死者は萬を計る。**張翼**は**維**に謂って曰く、
「以て止まる可し矣，宜しく復た進むべからず，或は此の大功を毀(やぶ)れば，蛇の為に足を畫(えが)くなり。」
維は大いに怒り，遂に進みて狄道を圍む。

蜀■［陳泰は羌維を擊退］辛未（7+60−46+1=２４日），長水校尉の**鄧艾**に詔して安西將軍（の事）を行い，**陳泰**と力を並せて**維**を拒がしむ。戊辰（4+60−46+1=１９日），復た太尉の**孚**を以て後繼と為す。**泰**は進みて隴西に軍し，諸將は皆な曰く、
「**王經**は新たに敗れ，賊衆は大いに盛んなり，將軍は烏合之卒を以て，敗軍之後に繼ぎ，勝ちに乘る之鋒に當るは，殆んど必ず不可なり。古人に言有り、『蝮蛇手を螫(さ)せば，壯士は腕を解く。』（漢書田儋傳曰く、蝮手を螫せば則ち手を斬り、足を螫せば則ち足を斬ると）《孫子》は曰く、『兵は擊たざる所有り，地は守らざる所有り。』蓋し小は失なう所有り、而れども大は全くする所有るが故也。險に據りて自ら保ち，釁を觀て敝を待ち，然る後に進みて救うに如かず，此れ計之得たる者也。」
泰は曰く、
「**姜維**は輕兵を提(ひっさ)げて深く入り，正に我と鋒を原野に爭い，一戰之利を求めんと欲するなり。**王經**は當に壁を高くし壘を深くし，其の銳氣を挫き，今乃ち與に戰い，賊をして計を得使む。**經**は既に破れ走り，**維**が若し戰い克つ之威を以て，兵を進めて東に向い，櫟陽（櫟陽は長安の東北で、略陽の誤りか。略陽は甘肅省渭川道秦安県、現・天水市秦安県隴城鎮）の積穀之實に據り，兵を放ち降を收め，羌、胡を招納し，東に關、隴を爭い，檄を四郡（隴西・南安・天水・略陽）に傳えれば，此れ我之惡む所也。而るに（羌維は）乃ち勝ちに乘る之兵を以て，峻城之下に挫け，銳氣之卒は，力を屈し命を致し，攻守は勢い殊に，客主は同じからず。兵書は曰く、『櫓（櫓車）・轒轀（城攻め車、裝甲車や突車）を修めるは，三月にして乃ち成り，拒堙（距闉、城壁の高さまで積んだ土塁）三月に而して後に已む。』（孫子の言）誠に輕軍遠く入る之利に非ざる也。今**維**は孤軍遠く僑（客兵たるをいう）し，**(5-064p)** 糧穀は繼がず，是れ我が速かに進みて賊を破る之時，謂う所の、疾雷は耳を掩うに及ばず，自然之勢い也。洮水は其の表に帶び，**維**等は其の内に在り，今高きに乘りて勢いに據り，其の項領に臨めば，戰わずして必ず走らん。寇を縱す可からず，圍みを久しくする可からず，君等は何ぞ言うこと是くの如きや！」
遂に進軍して高城嶺（隴西の首陽県にあり、甘肅省蘭山道渭陽県、現・定西市隴西県渭陽郷）を度り，潛かに行き，夜狄道の東南の高山の上に至り，多く烽火を擧げ，鼓角を鳴らす。狄道城中の將士は救いの至るを見，皆な憤踴す。**維**は救兵の卒かに至るを意わず，山に緣いて急に來たりて之を攻め，**泰**と交戰し，**維**は退く。**泰**は兵を引いて揚言す、
「其の還る路に向かわんと欲す」
と，**維**は懼れ，九月，甲辰（40−16+1=２５日），**維**は遁げ走り，城中の將士は乃ち出でるを得る。**王經**は

歎じて曰く、
「糧は旬（十日）に至らず，向に救兵速かに至るに非ざれば，城を舉げて屠裂され，一州を覆喪されん矣！」
泰は將士を慰勞し，前後遣り還し，更に（交代の）軍守を差（えら）び，並せて城壘を治め，還りて上邽に屯す。
■［司馬昭は陳泰の功績に感動］**泰**は毎に以えらく、一方に事有れば，輒ち虛聲を以て天下を擾動すと，故に事を上（もう）すこと希簡（希少簡約）にして，驛書するは六百里を過ぎず（狄道から洛陽は 2200 餘里、駅傳を以て洛陽に近き郡県に書を送りたる後は、常郵筒の如くに洛陽に達せしむ）。大將軍の**昭**は曰く、
「**陳征西**は沉勇にして能く斷じ，方伯之重きを荷い，將に陷ちん之城を救い，而も兵を益すを求めず，又た事を上すこと希簡なり，必ず能く賊を辦ぜん故（続は者）也。都督大將は當に爾るべからず邪！」
蜀**姜維**は退きて鐘提（羌中にあり、蜀の涼州の境、甘粛省渭川道成県の西北、現・隴南市成県）に駐まる。

呉［建業に太廟を作る］初め，吳の**大帝**は太廟を立てず，**武烈**（呉の大帝は父孫堅を諡して武烈皇帝という）は嘗て長沙太守と為るを以て，廟を臨湘（長沙郡の治所、湖南省湘江道長沙県、現・長沙市長沙県）に立て，太守をして奉祠せ使め而して已む。冬，十二月，始めて太廟を建業に作り，**大帝**を尊びて**太祖**と為す。

令和 4 年 7 月 15 日　　翻訳開始　　9826 文字
令和 4 年 7 月 23 日　　翻訳終了　　21291 文字